

創立二十五周年 江戸川学園物語 第二回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。「小さき足跡」十二号は、創立二十五周年を記念して江戸川学園物語をまとめられ、昭和三十一年十一月に発行されました。原文のまま連載します。

環境と発足 木内きぬ

江戸川学園が誕生してから廿五周年になる。人生で言えば青年期への第一歩を踏み出したわけになる。

此の記念すべき秋に当つて、学園の誕生から幼年期、少年期頃を思い出してたどたどしい筆を運んで見ることにする。

小岩の町は今でこそ人口八万を数える繁華街に発展しているが、私達一家が此の土地に移り住んだ頃（大正十三年七月）は南葛飾耶小岩村といつて、寂しい農村地帯に過ぎなかつた。

春先になると作物に撒いた肥料の上をからつ風がビュビュ吹きまわつて来て、小岩に居ると陽にやけるといふよりは肥料に顔がやける。

一帯が低い土地なので至る処に池を堀つて稍稍高い土地を作つてぼつぼつ、家が建つて行つた。

今の昭和通りの中央部にも矢張り大きな池があつて、雨が降るとそれが溢れ出て交通を妨げる。駅附近まで買物に行くのに私達は尻はしよりで跣足でよく出掛けたものである。私の家の前は五七坪の池で裏は百坪餘の細長い池、更に東側は八十坪餘の真四角い蓮池になつて居た池の廻りには一面に芦が生い茂つていて、何処までが地面で何処から池になつて居るのか一寸判別がつかない。子供達はこうした環境の中で跳ね廻つては蛙を捕え、蜻蛉をとらえて遊んで居るので、よく足許をばづし池に落ちて仕舞う。今の校長先生もその被害者の一人であつた。丁度其日は従姉が久しぶりで来訪せられて一家はそのままてなしに忙殺されて居た。何だか裏の方が騒々しいので外へ出て見ると長男が池に落ちて通りすがりの老母がそれ見付けて漸く助け上げた処であつた。顔は土のようでお腹は妙にふくれ上つていた。私は夢中で五才の長男を抱いて医者へ走つた。全身をがたがた震わせ乍ら……

それから何年かして前の森口さんの長男がとうとう池に命を奪われてしまつた。雨が降ると池はどんどん自分の領域へ土を迎んで敷地を狭めてゆく、私は池を鑑賞するような心の余裕を失つて、池そのものを憎むようにさへなつた。でとうとうなけなしの金を投じて池を全部埋めて、子供達の生命を守ることを餘儀なくされたのである。

こうした環境の中に、佐久間タネ氏が現れて小数の若い女性を集めて女塾を始められた。（私の家の裏で、現在松江第二中学校の校長小花先生の住宅になつてゐる）この塾が他年曲折を経て、今日の江戸川学園の発展へと運命づけられて行つた。

その頃（昭和五年）満州から帰国された松岡キン女史は、小岩に於ける女子教育の重要性を痛感せられて、自らの博識経験をよりよく生かして、私立の女学校経営を思い立つたのである。

佐久間女史にどう渡りをつけたか、私は知らないが免に角、同氏から備品竝に生徒そのままの譲渡を受けた松岡女史は、教育の場を外に求めなければならなかつた。

丁度その頃小岩小学校は校舎が新築されて、古い用材は不川になつた女史はそれを譲り受けて、校地三四五坪を現信用金庫理事長宮崎庄衛氏から借り受けて、ここに初めて現校地にクリーム色に塗れた校舎一五二坪の完成を見た。

城東高等家政女学校の名称の許に松岡キン女史は第一代の校長に就任。

翌昭和七年に江戸川高等家政女学校と改称せられた。本科修業年限四年定員八〇名 裁縫専修科一年定員四〇名 研究科一年定員二〇名となつてゐる。

その頃の女史には若さがあつた。美しくさがあつた。そしてたくましい実行力があつた。学校は女史の夢を乗せて、その手腕の上に、生徒数漸増の一路を辿つて行つた。女史の薫陶をうけた卒業生は女芸二通りは仕込まれ、堅実な思想を植え付けられていたので、近郷近在からお嫁さんの申込みが、よく学校を訪れて来た。

私が親しく松岡女史の全貌に接したのは、昭和七年、流木先生がほぼ保育園を創設せられたその時の開園式の時であつた。私の次男は当時第二期の入園生として荒木先生の門をたたいたので、私は父兄の一員としてはからずも松岡女史と同席の奇遇に恵まれた。

その時の女史のお話の内容は忘れてしまつたが、実に場慣れて居て、幼児をあかせない、父兄も面白く引ずつて行く巧妙さを持つて居られた。

人中へ出て堂々と話せる女性の極めて稀であつた当時の小岩にも、こうした女性の有ることは心強かつた。女史が地元の人達から押されて、婦人会々々長を務めて居られたのも決して偶然ではなかつた。然し女史が育て上げた婦人会も戦後隣組の解消と同時に、戦争の犠牲となつて跡方もなくなつてしまつた。終戦直後 地元の人達からの懇請によつて、沢が青葉婦人会を創設し、秤様の協力によつて、三年会長を務めさせて戴き、その地盤を堅めて行き、そして現在、江戸川学園の理事長を務めて居る。何だか眼に見えぬ絆が女史と私を結びつけつてゐるような気がしてならない。

女史が学園創設苦難の道を歩いて十年、生徒の激増は校舎の増築を餘儀ないものにして行つた。校舎西側に上下四教室の増築を企てられたことは決して無理からぬこと。然し世人は儲かる事業への投査は易いが、儲からぬ学校経営への出資は決して呉れない。建てさえすれば何とかなるだろうと思つた予想は完全に打ち破られてしまつた。

創立二十五周年 江戸川学園物語 第二回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。「小さき足跡」十二号は、創立二十五周年を記念して江戸川学園物語をまとめられ、昭和三十一年十一月に発行されました。原文のまま連載します。

運命のいたづら

北原白秋年譜によると、彼が南葛飾郡小岩三谷に、虹間から転居したのは、大正五年の七月で彼にとつては新婚早々の三十二才の時であつた。翌大正六年の六月には動坂に移つていたので、一年あまり此の小岩に歩を止めたことになる。小説『葛飾文章』や『雀の生活』は小岩に於ける彼の産物とも言える。ジプシーの群のように転々とし居を変えて行つた彼ではあつたが、この土地にしばしの地歩を止めたことは、全じ土地に後から移り住んだ私達の興味を引くに充分であつた。

それは昭和十五年九月末の秋日和の一日、小岩七丁目にある白秋の居住跡を尋ねて見ようと思ひ立つて、ぶらりと私達夫婦は家を出た。帰途学園の前を通りかかると新校舎は釘着けにされて建築主の名の許に売屋札が生々しく掲げられてあつた。生徒達はそれを尻目に旧校舎の方で依然として授業は続られていた。私達は異様な感に打たれると同時に、全じ教育者としての立場から、松岡女史の心情に思ひを致し、暗然として『何とか方法はないものかなあ』などと語り合つたりした。無残な姿を暴したままの幾日かゝ過ぎて、とうとう家屋札は取り去られ、新校舎に嬉々として学ぶ生徒達の姿を見るようになった。私達は全く救われた思ひでほつとした、然しそれも束の間の事で、学園の実権は買牧者の佐久間弘氏に移り、女史は依然として校長のイスには居られたものゝ、所詮教育者の使命と実業家の使命とは一致しない、採算の取れない学校経営を何時まで女史にゆだねて

黙認する筈はなかつた。遂に実権者は学園を改造してアパートにすると言ひ出した。苦節十年此処まで育て、来た愛児をどうして見殺しに出来得ない。女史の苦悩は此処に於て頂点に達したに迎ひない。かくて白刃の矢は今ほ亡き木内栄三郎に向けられたのである。木内は当時本所で公立青年学校長としての重責をになつていたが、教育者としての全じ立場から女史の苦衷を思い再参の要請に對して、背を向けるわけにはいかなかつた。其処で木内は女史と同道して同郷の財閥で幼友達であつた佐藤金属株式会社々長佐藤保氏を訪問した。氏の回答は女史に取つては冷厳そのものであつた。『木内君がやつて行こうというなら、その一族は皆教育者であるから、将来に望みをかけて出資をするが……』と言われる。が……の後の説明を考えた時、木内は学園引き受けは辞退せざるを得なかつた。当時若手の校長とし都からも同僚からも将来を囑目されていた彼としては、公職を捨て、まで学園に殉ずる気持は更々なかつたから……だが、時をうつせば学園はアパートに変貌する。女史は愛児の危急存亡の時に當つて、自ら身を捨て、その再建をはかる事に意を決した。女史と言へども女なればなかなか此のふん切りはつくものではない。

学園の後継者は此の人をおいては他にない、と臨を決した女史の慧眼は、矢つぎ早に木内の門を叩いた。かくて女史の熱ど誠意は流石がこんで通り意志の人で通つた木内を動かすことに成功したのである。

遂にバトンは渡された。平静を取戻した女史は『急によい息子が出来ましてね……』などと戯言を言われたりした。

現在女史は八十六才の高齢で、小岩の五丁目に静かな餘生を送つて居られる、学校の行事には時折出て来られて、卒業生に取囲まれ、昔話しをなさつたりする。おとしを尋ねると『私はいつも十三七つ、お月さんと全じ年ですよ。』と笑つていられる。

先日編集部員が訪問して女史のお話しをテープレコーダにおさめて来たが、語調も確かと言うことも確かりして居られる。

（出典…小さき足跡十二号「創立二十五周年江戸川学園物語」）

創立二十五周年 江戸川学園物語 第三回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。十二号は、創立二十五周年を記念して、江戸川学園物語をまとめられました。原文のまま連載します。

バトンは渡されて

世評紛々木内は江戸川学園を乗取つたとか、四人の子供をかゝえて公職を捨てて一体どうする心算だろうとか、何と言われても彼は齒がゆい程口をつぐんで語らない。ひたすら佐藤氏の友情と、松岡女史の信頼に答うべく黙々として使命達成への道を歩いて行つた。

昭和十五年十一月五日、江戸川高等家政女学校の備品一切の所有権並びに学校経営権は広瀬弘氏から木内栄三郎に譲渡された。

彼は純粋の教育畑の人で、青山師範と日本大学国漢科出という基盤の上に立つて、その生涯に終止符を打つまで四十年間教育街道をまっしぐらに突進して行つた。

性豪放磊落というか、豪胆不敵というか、せゝこましい教員タイプの鋳型の中におさまらないではみ出してしまふ荒けずりの一面があるかと思うと、実に細かい所によく気がついて、大きく人を包んで行く雅量と、寛容さを持ち合せて居た。

人間木内の意志と信念はぐんぐん自分に溺れる周囲を引きづつて行つて明朗活達な性格の中にとけこましてしまふ。それは青山師範の校長滝沢菊太郎先生の薫陶の賜であつたろう。彼が教師としての振出しは駒本小学校で、最初尋常一年生を担当した。それから六ヶ年を通して全じ子供を担当して行つたのだから、師弟間の愛情は肉身の愛情にまで深まつて行つた。

月給だけ仿げばよい、規定時間だけ要領よく務めればよい、自分達の増俸運動の爲なら、授業をさぼつても仕方ない、自分に都合の良い條件が見つければよいと生徒を投げ出して行つてしまふ。そう言つた考え方とは凡そ遠いものがあつた。

彼は学科では地理が好きであつたので、当時の教子松井湧君は東大卒業後、地質学研究室に居残られたのも多分その影響ではなかつたろうか。駒本で職員間の新旧思想の圧礫によく六ヶ年を堪えてきたのも教子達が可愛いかつたからである。その教子達の卒業と同時に、校長の机上に『氣息隠々小心慾孤児』の改名を奉つて今は亡き椎名竜徳先生の傘下に馳せ参じてしまつた。

生き乍ら改名を奉られた人の微笑を思い浮べて隠忍六ヶ年の溜飲を彼は一時に下

げたものであつた。

椎名先生の配下で、近藤、櫛引（現神田高校の校長の兄弟）木内は三羽鳥と言われ、又三頭政治などとも言われて、自分の教育に対する主張を生かし得るようになった。

話が十分横断にそれてしまつたが、公立畑の彼が私学に身を投じた事はいろんな意味で学園にプラス面が多かつた。木内個人としては捨て切れぬ椅子を捨て、来たのであつたが、彼は先づ学園に於ける教育方針を確立した。

要約してみると

物質文明は刻一刻その進展を見るが、逆に思想の堅実味を失いつゝある。其の原因は精神の修養を怠り、実際実力養成よりも知そのものに走つた結果で文化の中毒である。今之を治済するものは女子教育の改善に待たねばならぬ。女学校卒業という『レツテル』よりも内容の充実を計らねばならない、つまり精神修養と合せて女子に必要な知識技能をみがき、実際実際へと女子将来の生ある生活に進む。毎日朝礼には五分間の黙想をする。其の日一日を自らに誓う。つまり今日一日は決して嘘を言わぬ。今日一日必ず一善を撰ぶ。一日一善の実行を重ねて将来の自己を完成する。黙想の後『金剛石』を歌う。

勤労五則を朗唱して、凡ての仕事には創意工夫が伴わねばならぬと強調した。

更に彼は私学経営五ヶ年計画を樹立した。昭和十九年三月江戸川女子商業学校が設置され文部大臣の認可があり、初めて中等学校としての取扱いを受けるようになり全廿一年江戸川高等女学校と改称せられるに至つた。昭和十八年から全十九年にかけては応募者の入学率は六人に一人という状況で、校長は入学試験の直後は行衛不明になつてしまふ。仕方なく私は不合格者のなだめ役をしなければならない始末。狭い校舎に七百名からの生徒がくらしている、其処へもつて来て東京学園が焼け出されて同居しているのだから、何処へ行つても人、人にぶつかつてしまふ。

昭和廿三年の七月PTAの方々（会長山崎豊氏）が校庭の西側に二教室を増築して学校に寄付をして下さつたのでその混雑はいくらか緩和されるようになった。

勤労五則は校長が卒業して実行にうつして行つた。教室は糠を以つて磨かれ、廊下には紙屑一つ落ちていない。軍事会社に通員されて行つた生徒達は実によく仿いた、今思いは空しい可愛想な努力に終つて了つたが……この頃成績優秀で誰にでもよく好かれた高津けい子さんが日立の防空壕で直撃弾をうけて即死されてしまつた悲しい思い出もある。

敗戦という打撃はさなきだに感じ易い乙女には堪らない程のショックとなつて、ひび入つた壁がぼろぼろ落ちて行くように、何処の学校にも不良の生徒が表れるようになった。

創立二十五周年 江戸川学園物語 第四回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。十二号は、創立二十五周年を記念して、江戸川学園物語をまとめられました。原文のまま連載します。

この学園もその例にもれず、十一名の問題の生徒を数えるに至った。そのために、夜を日について職員会が開かれた。不良の子こそ善導すべきだ、それが教育者としての任務であると主張する一派と、いやたつた十一名の為に全生徒が悪影響をうけ、ひいては学校の名誉を傷つける結果になる。濁流と清流は全じ流れにおくべきではない。という一派に分れて各々一歩も譲らない。遂に校長は涙を吞んで十一名に対して断を下した。毎年卒業式には答辞半分まで読んだ頃になると、卒業生の泣き声が場内に満つるのだが、昭和二十四年度の卒業式当日は逆に校長の方から声を上げて泣き出してしまった。

『此の晴れの席上に列すべかりし十一名の姿の見えない事は全く自分の責任であつて、何とも申訳ない。』と言われる。私は木内との結婚生活三十三年の永きに及んだが、彼が声を上げて泣いたのを見たのは此の時が最初でそして最後であつた。

『どうぞ不良の群にだけは入らないで呉れよ』と血涙をしばつて叫んだあの時の声を、学園の生徒は、卒業生は今も心に通じていなくてはならない。学問を学ぶだけが学校ではない、よい人柄をも身につける。それが此の学校の伝統である筈。

時世の波

終戦後マッカーサー政策は日本民族の上に一大改革を断行して、その真髓を覆して行つた。その最も大きなもの、一つに学制改革がある。つまり六・三・三制の施行である。義務教育は小学校六年までのが、中学三年卒業まで延長を見た事は、敗戦のどん底に喘ぐ日本民族に取つて、どんなに苦しい負担であつたか。その施設のために自殺する村長が出るなど世の中はてんやわんやの中に、全国津々浦々にまで、のみの音が響き渡つて行つた。

その完成への途上小学校に間借りする中学校、私立学校に委託された中学生などが、現れて兎もあれ、教育の場合は中等学校五年制が三年になり、高等学校三年制がしかれ、大学六ヶ年が四ヶ年に小間切れにされてしまった。

今日十年の歳月の経過はそれが当り前のように世人に思わせるようになったが、私は中等学校五年制に限りない郷愁を感じる。

人間完成に最も大切な時期に、中学から高等学校へと教育の場が変つて行かねばならない事は、感じ易い青少年の心にどう響いて行くか太陽族が多くなりアプレが多くなる現代世相もこの制度に起因した点も多々あるように思われて仕方ない。

本学園でもお多分に洩れず委託生を三クラス江戸川区長からお引受けした。

本学園を目指して入つて来たのではなくて、制度に支配されて来たのだから、心から馴染まない、なじまないまゝに三年が過ぎて、社会に出て行つてしまふ。

今途中で出会つても挨拶もしないで行き過ぎるのはこの頃の委託生に多くて、その都度歯の抜けたような寂しさを感じる。

教育制度の改革は私立学校に大きな皺寄せとなり、一大暴風雨となつて襲つて来た。世上住むに家なく三畳一間に幾家族かの同居があるかと思うと、私立学校はがらあきとなり、一方目立つて立派な校舎を持つて屈る学校はアメリカ駐留軍の接收の憂目を見る有様であつた。

終戦直後の食糧不足は頂点に達した。学園では江戸川河畔に三千坪の農耕地を持つていたので生徒も職員も父兄も一緒になつて、せつせと学業の合間に農耕に精出した。先づ食わねばならない、生きて行くためには………木内は人に頭を下げる事が大嫌いであつたので、決して食料の買い出しにはゆかない、自ら先頭に立つて素人百性に任じていた。私達一家で麦二表、さつま芋十貫、馬鈴薯廿貫の収穫を上げたのだから、学園全体の収穫は大したものであつた。何処からこの力が湧いて来たか不思議である。然しこうした変則的な生活は悲劇をはらんでいた事はいうまでもない。昭和二十三年十月病魔は遂に木内の再起をこばむに至つた。

学制改革の餘波はいよいよ深刻となり、生徒は半減する、主柱が倒れて職員は座に落ち着かない。校舎は朽ちて来てまるで釣橋を渡るようだ。あらゆる悪條件が一時に押し寄せて、学園の危機はこゝに再び訪れたのである。命をかけた学園の行方はどうなることか、生徒達の見舞状の山積する中であつて、ひたすらその将来を思う病床に於ける校長の心情察するにあまりあるものがあつた。

占者の門を叩けり道づれの倒れて時の久しくなれば

亡き後をとぎれとぎれに語り居てふつと話の絶えて眼の合う

わびしさの極みに堪えて今日も又病み臥す人の肌ふきてやる

愛憎を乗り越えて今はたゞ静夫を看とれる室に陽の射し

たゞちつとみつめ居る眼にふと合いて心よみとれて戸迷う我か

創立二十五周年 江戸川学園物語 第五回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。十二号は、創立二十五周年を記念して、江戸川学園物語をまとめられました。原文のまま連載します。

昭和廿七年一月五日午前十一時十分、江戸川女子高等学校並びに江戸川中学校校長兼理事長木内栄三郎の訃報は都下各新聞の報ずる所となつて、壹千餘名の卒業生、友人知人に伝つた。こゝに校葬の礼を以つて学園再生の恩人を葬つたのである。香煙蒙蒙として会葬の群は堂にこぼれた。

若き命育む業に生涯を捧げし人の足跡は消えず

此の時の葬儀委員長は松岡先生の代から終始一貫この学校に籍をおかれる杉浦ちづ先生が務められた。

二つの壺

小さな命は失われて 石室深く埋められてしまつた

親達の嘆きを外に それから廿年

今その傍にさゞれ石のように真白な 光の通らない石室の中に

あなたの骨が 家族が一人殖えたとして

稍々大きなつぼに入れられて 別に喜びも悲しみもない

寄り添うように置かれた のぞいてはならない神秘を見るように

且つて血の通つていた二つの生命も 薄光の中に息をつめて凝視めて居た

今は大きな壺、小さなつぼに過ぎない 人々の手向ける香煙が

だが私にはかけがえのない宝玉 早春の空に解けて行く、残されし者のうつろな心。

三度ボタンは渡されて

先づ陣容を整えることが先決問題である。理事会の決議によつて、私が理事長に、木内二郎氏が校長兼理事。

佐藤金屈株式会社々長

県立筑波学園長

佐藤保氏（理事）

岡野豊四郎氏（全）

専賣局事務課長

山中久一氏（全）

岩崎勝二氏（会計監査）

沼館定廉氏（全）

宣伝社々長

石塚信夫氏（PTA会長）

そして評議員五名が卒業生、職員の中から選出されて、スタートは切られた。

幸にして三代目現校長は、青山師範が旧制高等師範を卒業して公立学校に一ヶ年の経験を持つていたので、教育の面はお委せて、安心であつたので、私は専ら事業面に力を注ぐ事にした。大へんな男気が必要であり、悲壮な決意は時に悲願にさえ思えて来る。

「故人に祈りつ、休当りでやつて行け日！」それが私のモットーであつた。

陣容が整つたら、教育の場を新らしくして環境をよくしなければならぬ。故人の卅五日も無事に済ませて、私は旧校舎の改築を決意した。がその原動力をどうするか、その頃は未だ私立学校三法案も通過してない、従つて私学振興会に頼るわけにも行かなかつた。

岡野理事の賛意を得て、昭和廿七年五月一日二人は佐藤氏を訪問した。全氏の木内に對する信用は、私に對する信用にまで延長してゐたことを知つて涙がこぼれる程うれしかつた。

それは故人の餘徳というものであらう、佐藤理事は資金面の裏付けを確約して下さつた。

之に力を得た私は直ちにPTA会長を訪問してそのむきを相談すると、大へん喜んで下さつて、すぐ委員会を開いて江戸川学園改築後援会を組織して下さつた。八月の暑熱をおかして東奔西走会長初め委員の方々はよく協力して下さい。かくて十一月五日創立記念日には講堂並びに二階二教室が完成した。

グリーンと白壁の朋るい調和 末摘花が表れて平安絵巻が繰り広げられ

遂に竣工を見た学園の講堂 時にバッハの曲目が流れて

手足も青春の心も 組合せ式の床板にひびく

のびのびさせて 建設の苦悩を乗り越えた喜びが

娘達は踊る かすんだ網膜を往来する

ステージに光源氏が現れ

創立二十五周年 江戸川学園物語 最終回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。十二号は、創立二十五周年を記念して、江戸川学園物語をまとめられました。原文のまま連載します。

講堂の中央に『以和貴為』西脇呉石先生の額を岡野理事が寄付して下さった。一方教育内容の面で新校長は職員の刷新をはかり、各部施設の充実に意を用い、文部省家庭科産業教育の指定を受け、職員研究を盛にするなどに力を致し、私立に応わしい学問にのみ偏しない人柄の育成に重点をおいてこつこつと地道な歩みを続けて行つた。職員の和と協力と相まつて学園の第二の危機はようやく曙光への段階を見るに至つた。近々五年の歩みを辿つて見よう

昭和廿六年二月宮崎氏所有の校地四四九坪を買収

昭和廿六年十月廿五日大橋栄吉氏所有の土地八十一坪を学園花壇とし購入

昭和廿六年十一月四日創立廿周年式典挙行

昭和廿七年十一月廿二日講堂落成式典挙行

昭和廿九年三月校庭の地続二百廿三坪矢口政雄氏より購入

昭和廿九年八月校庭東南隅にある住宅（書院）を移転完了（八十一坪内に）

昭和卅年十二月十四日校庭東側にありし田端実氏所有の家屋木造平家十四坪に二

合五勺を購入、塙重雄氏転居先と定む

昭和卅年十二月校舎南側に居住の、塙氏一家転居完了

昭和三十一年一月校庭南側、塙氏居住せし家屋十五坪七合五勺取壊完了

昭和卅一年四月十七日校庭南側に二階建一棟七十一坪の建築を朝日工事に依頼契

約成立

昭和卅一年四月二十三日塙氏転居先の土地卅八坪一合を（杉浦音次郎氏所有）借

地契約完了

昭和卅一年五月十五日書院移転先の地続の土地五四坪八合七勺、家屋二十三坪七

合二勺を田中宗一郎氏より購入

昭和卅一年九月一日校舎西側七十一坪（二教室、理事室、事務室、新玄関）増築

完了（二十五周年記念事業）

昭和卅一年八月北軽井沢に山荘予定地六百坪を購入

こうして羅列して見ると、読む人に取つては何の興味もなく、事はすらすらと運んだようにも思えるが、その衝に当つて見るとその一つ一つに苦勞の汗がにじんで居る。

然も一つ一つ確保して行つても、もう之でよいという時はない、それ程世間の進歩は早いのである。ちつとしていたら置いてけぼりにされてしまう。第三の波が何時襲つて来るかもわからない。

この九月の展覧会に編集部の人達が学園の将来構想を描いた模型を出品された。二年生がそれに対して『ドリーム』の名称をつけた。

実際この夢の実現に向つて飛躍しなければならぬ大きな示唆となつてゐる。そうしてそれはもう私の手には届かない。次代を背負う者の双肩にかゝつてゐるのである。思ひは木内に死別以来四年の歳月、私に取つては悪戦苦闘の生々しい現実であつたが、兎も角、危機は乗り超えてこゝまで辿つて来たことは私を巡る周囲の人達の努力の賜である。感謝の心を以つて謙虚に生きて行こう。

（筆者は学校法人江戸川学園理事長）

創立三十周年を夢見て

木内一郎

創立二十五周年と一口には言はれるが容易な事ではない。大きな波小さな波が絶え間なく襲いかかり、その都度苦慮し、対策を立てやつとの思いで乗り切つて来たものである。

人間にたとえてみれば赤児よりやつとの事で成人し、これから何か社会のために奉仕する年代に入つたと言え様か、廿五周年のこの機会に三十周年の時における成長ぶりを思い、又一段と心を新にしたものである。

（出典…小さき足跡十二号「創立二十五周年江戸川学園物語」）